

ブルー・アイランド氏が やりたかったこと

第5回 プランクトン研究者

正確に言うと、水中を浮遊している微小生物（プランクトン）ではなく、淡水に生息している原生動物を顕微鏡で観察するのが趣味だった。通っていた小学校では、4年次から図書室が使えるようになるので、図書係に立候補し、貪るように本を読んだ。そのとき読んだ、戦後すぐに出版された小学生向きの本に、顕微鏡で見た世界について書かれた二冊があり、目から鱗が落ちたような気がした。

それ以前に、デパートで買ってもらった安物の、それでも500倍まで拡大できる顕微鏡で、花粉やら蝶の鱗粉などを見ていたが、これらは肉眼でも、しかと存在を確かめられる。しかし、一滴の水の中に、そんなにたくさん生物が泳ぎ回っていることなど、誰も教えてはくれな

かったのだ。

手始めに、金魚鉢からスポイトで水を吸い上げ、スライドグラスの上に落とし、300倍で見ると、いるわいるわ、奇妙な格好をした生物が蠢いていたのである。最初に現れたのが孳孳（むさむさ）なワムシで、しかしこれは単細胞の原生動物ではなく、むしろその捕食者であった。

次に見つけたのは、茎が伸び縮みするツリガネムシで、これはいくら見ても飽きなかった。歴史上初めて原生動物を発見したレーウエンフックも、この生物を初めに見つけて興奮したのである。そのうちにスライドグラスを揺らして、水の中のワムシをぶつけ、茎が縮まるのを見て喜んだのと同じだ。

しかし、本に出ていたアメーバとゾウリンムシ

はなかなか見つけれなかった。半年ほど

ついで、泡だて器で洗った物体がど

ろどろろ形を変えて移動して

いくのに気づき、これがア

メーバだと確信し、その

途端にいつはいるのだ

と気づくことがあった。

ゾウリンムシは全く出会え

ず始末となる。私に常に奇

り添ってついでに祖母に見

せると、子どものように喜んでい

れたが、アメーバの名前を聞くと怖ろし

がって鏡筒から目を離した。戦前からアメーバ

赤痢の話を聞いていたためらしい。

B（ブルー・アイランド＝青島）の顕微鏡好きは、少女漫画や音楽の修行へと取って替わり、いつしか遠い記憶となっていました。

そして現在、側には柴犬がいる。おとなしく、決して吠えない。これが今では原生動物の代わりと言ったら、犬に失礼だろうか。いや、原生動物を気に入っていたらしい祖母もまた犬が好きだった。だから、彼女に免じて許してほしいと思う。祖母は当時どこにでもいた野良犬に、餌をやっていたのだから。



文と絵 青島広志

1955年東京生まれ。東京藝術大学講師。洗足音楽大学客員教授。よみうりカルチャー荻窪と、よみうり大手町スクールでも音楽講座を担当している。11月11日（日）13時から、よみうりカルチャーの船橋ららぽーとセンターで公開講座「日本の歌を皆さんで」を開催。また、熱烈なマンガファンでもあり、11月16日（金）18時半からは、よみうり大手町スクールで「2つの同人誌——『墨汁一滴』と『けむり』」をテーマに、懐かしいマンガについて語る。

写真提供：Gakken Pub